



Title	古今集時代の〈はなすすきと袖〉の構図形成について
Author(s)	蒲, 姣艶
Citation	語文. 2022, 118, p. 44-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95232
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古今集時代の〈はなすすきと袖〉の構図形成について

蒲 姣 艶

一、問題の所在

万葉集には見られず、古今集時代^①になって、はじめて和歌に詠まれる歌材（以下、「新歌材」とする）がある。本論で扱うはなすすきを袖に見立てる構図（以下、〈はなすすきと袖〉の構図とする）もその「新歌材」の一つである。その初見を左に掲げる。

◆寛平御時后宮歌合^②

秋歌廿首

在原棟梁

86あきの野の草のたもとか花薄ほに出でてまねく袖とみゆらん
 〈はなすすきと袖〉の構図は寛平御時后宮歌合にはじめてみられるもの（以下、棟梁歌とする）であり、その後、左に示したように古今集撰者時代に多く用いられるようになる。

秋

(1) しろたへのいもがそでてあきののにほにいでてまねくはなすすきかな

秋

(2) すぎがてにのべにきぬべしはなすすきこれかれまねくそとみゆれば

（躬恒集・466）

御かへし

(3) よぶとしもこゑはきこえではなすすきしのびにまねくそとみゆめり

（伊勢集・29）

またかくきこえたてまつれる

(4) 人もきぬをばながそでもまねかればいとあだなるなをやたちなむ

（伊勢集・30）

(5) わがそでのかはりにおふるはなすすき人をまねくとしらがらめやは

(1)では、妹が招く袖と見えるのがはなすすきであると歌う。(2)では、はなすすきを袖に見立てる。(3)では、はなすすきのような招く袖も見えするという。(4)は(3)と贈答歌となっており、(4)の「をばな」は(3)の「はなすすき」を受けて歌っている。尾花のような袖で招かれるという。(5)では、はなすすきを我が袖の代用として歌われている。以上の例から、古今集撰者時代には、(はなすすきと袖)の構図が定着しているように見える。

後述する先行研究では、この構図が漢故事を踏まえたものであると指摘されているが、本論では、故事の受容を再検討し、その形成過程を跡づけることを目標とする。

二、故事受容の再検討

〈はなすすきと袖〉の構図の初見である棟梁歌は『新撰万葉集』にも収録される。

103 秋之野の あきののの 草之袂歟 くさのたもとか 花薄 はなうすき 穂丹出手招 ほにいでてまねく 袖砥見湯濫 そでとみゆらわ

秋日遊人愛遠方 秋日遊人遠方を愛し

逍遙野外見蘆芒 野外に逍遙して蘆芒を見る

白花揺動似招袖 白花揺動して招く袖に似たり

疑是鄭生任氏嬢 疑ふらくは是鄭生と任氏嬢とか

和歌に詠まれる〈はなすすきと袖〉の構図は、漢詩では、「白花揺動似招袖」に言い換えられている。この漢詩について、川口久雄氏は以下のように言及されている。

「花揺動似招袖、疑是鄭生任氏嬢」と詠むのは、女に化けて鄭子と結婚した狐妖の話、唐代伝奇、沈既濟作の「任氏伝」、もしくは白居易が詠んだといわれる「任氏行」もしくは僧円仁が唐からもたらしたといわれる「任氏怨歌行一帖」などの影響であることは否定しえない。

川口氏は「白花揺動似招袖」という表現は、『任氏伝』もしくはそれに基づくと推測される「任氏怨歌行」からの影響であると述べられている。その後、小島憲之氏は以下に指摘している。⁽⁴⁾

この歌には比喩という「見立て」があり、そこに理屈もある。しかもその背景には一つの新来の故事が存在することを忘れてはならない。この歌に並んだ詩には、(詩の引用を省略)と見える。これは既に指摘されている如く、承和六年遣唐使藤原常嗣の帰朝に際して将来された白居易の「任氏怨歌行」に基づく。「任氏怨歌行」は鄭子と女妖任氏との物怪に関する神怪小説「任氏伝」を骨子とする白居易作の歌。白い花すすきのゆれるのを見て白衣を着た美人任氏を連想するなど、この歌および詩に見る白詩の摂取はすばやい。

小島氏は、この和歌に見られる〈はなすすきと袖〉の見立ては『任氏伝』を骨子とする白居易作「任氏怨歌行」の摂取であると説かれている。

はたして〈はなすすきと袖〉の構図が「任氏伝」もしくは「任氏怨歌行」からきたものであろうか。ここでは、『任氏伝』および「任氏怨歌行」の本文に戻して、その関係性を確認したい。まず

「任氏伝」から、和歌と漢詩に關わる本文を左に示す。⁽⁵⁾

天寶九年夏六月、峯與^二鄭子^一偕行^二於長安陌中^一、將^三會^二飲於新昌里^一。至^二宣平之南^一、鄭子辭^レ有^レ故、請^レ間去、繼至^二飲所^一。峯乘^二白馬^一而東、鄭子乘^レ驢而南、入^二昇平之北門^一。偶值^二婦人行^一於道中^一。中有^二白衣者^一、容色姝麗。鄭子見^レ之驚悅、策^二其驢^一、忽先^レ之、忽後^レ之、將^レ挑而未^レ敢。白衣時時盼睐、意有^レ所^レ受。鄭子戲^レ之曰、美体若^レ此、而徒行、何也。白衣笑曰、有^レ乘不^レ解^二相反^一、不^二徒行^一何焉。鄭子曰、劣乘不^レ足^二以代^一佳人之步^一、今輒以相奉。某得^二步從^一、足矣。相視大笑、同行者更相眩誘、稍已狎暱。

『任氏伝』の本文からは「白衣」は見られながらも、それ以上の展開は見られず、へはなすすきと袖の構図にあたる表現は見当たらない。

次に、「任氏怨歌行」を見てみたい。「任氏怨歌行」そのものが現存しないが、その残句を以下のように掲げる。⁽⁶⁾

①『錦繡万花谷』（前集・卷十七・美人）に二聯

蘭膏新沐雲鬟滑
寶釵斜墜青糸髮
蟬鬢尚隨雲勢動
素衣猶帶月光來

蘭膏新たに沐して雲鬟滑らかなり
寶釵斜めに墜つ青糸の髮
蟬鬢尚ほ雲勢に隨ひて動く
素衣猶ほ月光を帯びて来れり

②『千載佳句』に二聯

燕脂漠漠桃花淺
青黛微微柳葉新

燕脂漠漠として桃花淺し
青黛微微として柳葉新たなり

（人事部・美女・42）

玉爪蒼鷹雲際滅
素牙黃犬草頭飛

玉爪の蒼鷹雲際に滅ゆ
素牙の黃犬草頭に飛ぶ

（遊牧部・遊獵・897）

右掲の「任氏怨歌行」の残句のほとんどは任氏的美貌に着目する表現であり、囲み部分で示したように、『任氏伝』と同じく、「素衣」が見られるものの、へはなすすきと袖の構図にあたる表現は確認できない。

さらに、「任氏怨歌行」を受容したと思われる平安人の手によるものを以下のように掲げる。⁽⁷⁾

③『新撰万葉集』・下巻・恋歌

482 髣髴丹見芝 人丹思緒 属染手 心幹許曾 下丹焦礼

ほのにみし ひとにおもひを つけぞめて こころからこそ したにこがるれ

任氏顔貌彷彿宜 任氏の顔貌彷彿として宜し

粉黛不無眉似柳 粉黛無きにあらず眉柳に似たり
朱砂不企唇如丹 朱砂企ざれども唇丹の如し
心思肝属猶胸焦 心に思ひ肝に属けて猶ほ胸焦がる

④源英明「春雨洗花顔」詩⁽⁸⁾

春雨何因細脚頻 春雨何に因りてか 細脚頻りなる
為過花面洗紅塵 花面を過ぎて紅塵を洗ふ為なり
（韻聯逸失）

写得楊妃湯後靨 写得たり楊妃の湯の後の靨
模成任氏汗来唇 模し成せり任氏が汗の来る唇
花情若聽吾微誨 花情若し吾微誨を聴せば

莫恃妖姿妄折人

姿を恃りて妄りに人に折らるること

莫かれ

⑤ 大江匡房「狐媚記」(群書類従本)

嗟呼、狐媚姿異、多載「史籍」。殷之妲己為「九尾狐」、任氏為

「人妻」、到「於馬鬼」、為「犬被」獲。

③では、任氏の容貌に着目している。④では、楊貴妃と対比的

に捉え、その美貌が重視されている。⑤では、狐の化身である任

氏が言及されるのみで、それ以上に言及されていない。

以上のように、先行論では「はなすすきと袖」の構図が「任氏

伝」もしくは「任氏怨歌行」に基づく表現だと指摘されているが、

現存する「任氏伝」また「任氏怨歌行」の残句に戻して確認する

と、「はなすすきと袖」の構図にあたる表現は見られない。また日

本で見られる「任氏伝」の受容の中でも、それに相当する表現は

確認できない。

つまり、棟梁歌に詠まれる「はなすすきと袖」の構図から、任

氏に連想させる素地があると考えられるが、しかし、その構図自

体が任氏の記事を踏まえたとは考え難い。

三、漢詩文からの影響

第二節で、「はなすすきと袖」の構図が直接漢故事を踏また可能性は低いことを確認したが、しかし漢詩文からの影響はまだ考えられる。ここでは、漢詩文からの直接影響はあるかどうかを検討する。その前に「はなすすき」はいかなるものかを見てみよう。

「はなすすき」について、内田順子氏の指摘が見られる。⁽⁹⁾

「すすき」を「薄」と表記する例は上代に見られず、現存資料中では本集(『新撰万葉集』、筆者注)が最初だと思われる。

『万葉集』では「旗芒^{はたすき}」本葉もよそに(十・2089)の一

例を除き、すべて「皮為酢寸」穂には咲き出ぬ」などの仮

名表記。一方「日本書紀」には、「幡荻穂出吾也」(神功皇

后摂政前紀)「蘆尾直^{すすき}」(孝徳紀大化二年)などの古訓が見ら

れる。このことは「荻」「蘆」「すすき」の分類がススキと総

称されたか、日本のススキと中国側の植物名の対応が容易で

はなかったかのいずれによると考えられるが、『和名類聚抄』

(草木部・草類)に「荻 野王案云、荻(音狄、字亦作薊、乎

岐)與薊相似而非一種」、「蘆葦、兼名苑云、葭(音家)、一名

葦(音焯、阿之、爾雅注云、一名蘆(音盧)」とあることから

見て、後者であろう。

内田氏は上代の「すすき」を扱い、それは日本的なものだと推

測し、古今集時代に見られる「はなすすき」は「その実質的な意

味と働きにおいても、子音一つの相違という外形の上でも、「はた

すすき」「はだすすき」を受け継ぎ、それらに取って代わっていた

新しい形である」と述べられている。

「はなすすき」は日本的なものであるという内田氏の見解は首

肯できよう。また、上代では「芒」「荻」「蘆」を「すすき」と訓

ずることと、棟梁歌に対応する漢詩では、「はなすすき」が「蘆

芒」と表現されることから、「はなすすき」は「荻」「蘆」に酷似

することが考えられる。

ここでは、漢詩文の「萩」「蘆」に着目し、それらは「袖」との関わりを見てみたい。『先秦漢魏晉南北朝詩』『全唐詩』に見られる「萩」「蘆」に関わる見立てを左に示す。

蘆	萩
白雪	3例
白霜	1例
月光	1例
	白波
	2例
	1例

右記例から、〈はなすすき〉と形態が酷似する「萩」「蘆」は「袖」また服飾との結びつきは見られず、それらを服飾に見立てる例は見当たらない。総じてみると、〈はなすすきと袖〉の構図形成に漢詩文が直接関与しているとは考え難く、視点を変える必要がある。

四、先行和歌との関わり

「はなすすき」と「袖」が古くから歌材として愛用されている。〈はなすすきと袖〉の構図は伝統和歌から派生した可能性はある。『万葉集』では、「はたすすき」が八例、「はたすすき」が二例、「すすき」が五例、「はなすすき」一例が見られる。また、「尾花」は十八例ある。それらの例を左に示す。

すすき	尾花
穂に出づ	7例
おしなべる	2例
	尾花に置く露
	3例
	おひなびく
	1例

散る 1例 庵にふく

本葉もよそに 1例 おしなべる

かよひちの 1例 散る

入りの野の 1例 ふきこす秋風

佐保のうちの 1例 秋花

宇良野の山の 1例 尾花になくもす

つくれる室の 1例 尾花の下草

妹が家の尾花 1例 花にみむ

右掲例から、「すすき」「尾花」が歌材として古くから詠まれている。その中で、囲み部分で示したように、はなすすきが風で揺れることも詠まれている。それらの例を左に掲げる。

① (略) 旗荒 本葉裳具世丹 秋風乃 吹来夕丹

(万葉集・卷十・秋雑歌・七夕・2089)

天平勝宝五年八月十二日三大夫等、各提壺酒登高円野、

聊述所心作歌三首

② 多可麻刀能 乎婆奈布伎故酒 秋風尔 比毛等伎安気奈

多太奈良受等母

(万葉集・卷十九・4295・家持)

③ 秋野 尾花末 生靡 心妹 依鴨

(万葉集・卷十・秋相聞・2242)

①では、秋風で、はなすすきの本葉がそよそよとするという。②では、秋風が尾花を吹き越えてくるという。①②からは、風とはなすすきがともに詠まれていることがわかる。また、③の尾花の

末がなびくという。

①②③から、古くからはなすすきと風が結びつけられて詠まれており、なびく性質が注目されることがわかる。しかし、はなすすきを何かに見立てるような見立て関係が確認できず、また、袖や服飾との結びつきも見られない。

また、袖も古くから歌材として多く詠まれる。『万葉集』に見られる袖例を以下にあげる。

袖振る	31例	袖に入れる	2例
袖濡れる	15例	袖に置く露霜	2例
袖まく	9例	袖を見る	1例
袖かわく・干す	7例	袖つぐ	1例
袖交える	6例	袖に受ける	1例
袖別れる	5例	袖にほふ	1例
袖ひつ	4例	袖にふりつる雪	1例
袖かたじく	3例	袖床うちいはらふ	1例
袖返す	3例	袖なれにし	1例
袖反る	2例	袖をたのむ	1例
袖を笠に着る	2例	袖たづさはる	1例

右掲例から、袖が多く詠まれていることがわかる。囲み部分に示したように、古くから袖の動きが注目されている。しかし、そこには、袖とはなすすきとの結びつきが確認できず、また袖を何かに見立てる例も見られない。

以上のように、「はなすすき」が風に揺れることや、「袖」の動

きが注目されているものの、〈はなすすきと袖〉との結びつきがまだ見られない為、別の視点から考察する必要がある。

五、〈見立て〉の拡大による変容の可能性

既に確認してきたように、〈はなすすきと袖〉との結びつきは漢文には見られなく、先行する和歌にも確認できない。ここからは〈はなすすきと袖〉の構図の根底にある、はなすすきを袖に見立てる」という見立て関係に目を転じたい。

〈はなすすきと袖〉の構図は棟梁歌が初見であるが、そこには、はなすすきという植物の花が服飾の袖に見立てられている。このような、花を服飾に見立てる例は『万葉集』から見られる。本節では、そうした流れの中にどのようなようにして〈はなすすきと袖〉の構図が加わってくるのかを追ってみた。

『万葉集』では、花を服飾に見立てる例は僅か一例のみであり、以下に掲げる。

1053、讀久速新京一歌二首

吾皇	神乃命乃	高所知	布当乃	宮者	百樹成	山者	木高之
おちたぎつ	たかみ	たかし	ふた	の	の	の	の
落多芸都	漏音毛清之	鶯乃	来鳴春部者	巖者	山下	麓	
はな	はな	はな	はな	はな	はな	はな	はな
錦成	花咲乎呼里	左壮鹿乃	妻呼秋者	天霧合			
之具礼乎疾	狭丹頰歷	黄葉散乍	八千年尔	安礼衝之			
あめのした	しろしめさむと	ももよにも	かわもべからぬ	おほみやこころ			
天下	所知食跡	百代尔母	不可易	大宮処			

(万葉集・卷六・雑歌・田辺福麻呂)

囲み部分には、錦をなすように、春の花が咲きたわむと、春の花が錦に見立てられていることがわかる。しかし、『万葉集』以後古今集撰者時代までの和歌において、花を錦に見立てる例は管見では見られない。この一例が（はなすすきと袖）の構図形成に直接関与しているとは考え難い。

一方、漢詩集では、花を錦に見立てる例は見られる。三大漢詩集および家集に見られる花を錦に見立てる例を左に掲げる。

(1) 三月三日曲水宴

錦巖飛瀑激、

春岫暉桃開。

錦巖飛瀑激き

春岫暉桃開く

（懷風藻・54・山田三方）

(2) 暮春於第園池置酒

天霽雲衣落、

池明桃錦舒。

天霽れて雲衣落ち

池明らかにして桃錦舒く

（懷風藻・94・藤原万里）

(3) 題橘才子所居池亭

錦段粧残晴杏落、

囊錐顚脱湿蘆穿。

錦段粧残し晴杏落つ

囊錐顚脱し湿蘆穿つ

（田氏家集・卷上・47）

(4) 賦雨中桜花

低入潦中江濯錦、

暖霑枝上火燒新。

低れて潦の中に入りて江に錦を濯ぐ

暖かく枝の上を霑らせば火は新を焼く

（田氏家集・卷下・149）

(5) 詠瞿麦花呈諸賢

錦窠寸截袞繁華、

不道優曇在釈家。

（菅家文章・卷一・29）

(6) 並水花

恰似湘妃臨岸泣、

欺誣蜀錦帶波浮。

（菅家文章・卷四・287）

(1)では春の花を錦に、(2)では桃の花を錦に(他に三例ある)、(3)

では杏の花を錦に、(4)では赤い桜の花を錦に、(5)では瞿麦花を錦

に、(6)では赤い花を錦に、それぞれ見立てている。

これらの例から、花を錦に見立てることは、既に定着しているように思われる。その中で、春の赤系の花を錦に見立てるという基本構図が見られる。しかし、三大漢詩集では、この構図の拡大は見られない為、そのまま（はなすすきと袖）の構図形成に一直線に繋がるとは考え難い。

一方、『田氏家集』『菅家文章』では、それまでに見られない新たな展開を見せている。

(10) 重陽後節題秋叢葩製一首

蘭佩始応鳴紫玉、

菊粧猶未綻黄袍。

蘭の佩は始めて紫玉を鳴らすべし

菊の粧は猶し黄袍を綻ばさず

（田氏家集・卷下・168）

(11) 紫藤

高閣藤花次第開、高閣の藤の花は次第に開く
疑看紫綬向風廻。疑ひて看る紫綬の風に向ひて廻れるかと

(菅家文章・卷五・395)

(10) では黄色の菊の花を「黄袍」に、(11)では紫色の藤の花を「紫綬」と表現している。その中で特に注目したいのは、左に示す白い花を服飾に見立てる例である。

(12) 翫梅華

梅樹花開剪白綬、梅樹花開きて白き綬を剪る

春情勾引得相仍。春情勾引されて相仍ること得たり

(菅家文章・卷一・11)

(13) 早春侍宴仁壽殿、同賦春雪映早梅

氷純寸截輕粧混、氷純寸に截りて輕き粧ひ混けたり

玉屑添来軟色寬。玉屑添へ来りて軟なる色寬なり

(菅家文章・卷一・66)

(14) 早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字。探得迎字。

裂素誰容勞少女、素を裂きて誰か容さむ少女を勞めしむるを
占巢莫怪妬初鶯。巢を占めて怪しむ莫かれ初鶯を妬むを

(菅家文章・卷一・67)

(15) 惜殘菊

奪情只有披沙練、情を奪へばただ沙に披く練あらくのみ
平價其如合浦珠。價を平にすれば其れ合浦の珠の如し

(菅家文章・卷五・356)

(16) 九日侍宴、同賦菊散一叢金

不是秋江練白沙、是れ秋江に白沙を練るにあらず
黄金化出菊叢花、黄金化出す菊叢の花

(菅家文章・卷六・460)

(12)では白梅が「白綬(しらぎぬ)」に見立てられている。(13)と(14)では白梅を「純」「素」と、いずれもしらぎぬの切れに見立てる。(15)は墨子の故事を踏まえながら、白菊を白い練に見えている。また(16)では、黄色の菊と対比的に白菊を白いうすぎぬと表現している。

このように、忠臣・道真の例からはそれまでに見られる春の花を錦に見立てるといふ既存構図から、各色の花を服飾に見立てると構図の拡大が見られる。忠臣・道真例に見られるこの現象は白詩から影響を受けているかと考えられる。

中国文学では、花を錦に見立てることは古くから存在し、管見では左に掲げた『文選』の例に遡れる。

茂樹蔭蔚、芳草被隄、蘭茝發色、曄曄猗猗、若摘錦布、
燭耀乎其陂。

李善注…曄曄、花色貌。猗猗、美貌。摘、舒也。言草樹花色
美盛、如舒布錦繡、燭耀於塘陂上。

(文選・卷一・西都賦・班固)

このような花を錦に見立てる構図はその後にも継承され、『全唐詩』にも多く見られ、白詩にも確認できる。しかし、以下に示すように、白詩とその周辺では、新たな展開が見られる。

① 紅芍薬

芍薬綻紅綃、

巴籬織青瑣。

芍薬紅綃を綻ぶ

巴籬青瑣を織る

(全唐詩・卷四〇一・14・元稹)

② 紫躑躅

紫躑躅、

減紫攏裙倚山腹。

紫躑躅

減紫攏裙山腹に倚る

(全唐詩・卷四二一・2・元稹)

③ 山枇杷

緊縛紅袖欲支頤、

慢解絳囊初破結。

緊く縛る紅袖頤を支へむと欲す

慢く解く絳囊初めて結を破らむとす

(全唐詩・卷四二一・3・元稹)

④ 惜栢李花

辭枝朱粉細、

覆地紅綃薄。

枝を辭して朱粉細やかに

地を覆ひて紅綃薄し

(白氏文集・卷九・440)

⑤ 山石榴寄元九

泪痕衰破燕支臉、

剪刀裁破紅綃巾。

泪痕衰破す燕支の臉

剪刀裁破す紅綃の巾

(白氏文集・卷十二・593)

⑥ 題山石榴花

一叢千朵压闌幹、

翦碎紅綃却作团。

一叢千朵闌幹を压す

紅綃を翦碎して却って团と作す

⑦ 見紫薇花憶微之

一叢暗澹将何比、

浅碧籠裙纒紫巾。

一叢暗澹たり将た何にか比せん

浅碧裙に籠めて紫巾に纒す

(白氏文集・卷十六・927)

①では紅芍薬を赤い薄絹に見立てる。②では紫躑躅を紫色の攏裙に見立てている。③では、山枇杷の花を「紅袖」の人のように擬人化している(他に一例ある)。^①④では、木から舞い散って地面を覆う栢李花を紅い薄絹という。^②⑤⑥では山石榴の花が紅い薄絹の巾を剪ったようであるという(他に三例ある)。^③⑦では、一叢咲く紫薇花は碧色の裙に紫の巾が添えられているようである。

このように、白詩とその周辺から、赤系の花を赤い服飾に見立てるという新構図が見られる。白詩の構図発想を継承し、忠臣・道真により、赤い花に止まらず、前述したように、黄色の花にも白い花にも応用し、さらなる展開を見せている。その中で、特に道真例では、白い花を白い服飾に見立てる例が多い。^④

このような中国にあつたものを、日本で応用し、さらに展開するのは、既述したことに限らない。すでに指摘されているように、白居易の「三月尽」を継承し、道真はそれを「九月尽」として新たに作り、その後古今集撰者たちも和歌において「九月尽」歌を試みている。^⑤また、中国文学にある花を錦に見立てる発想を受けながらも、日本では、花を紅葉に応用し、特に忠臣・道真にまともって見られる例は、後世のもみち錦の表現一般化に繋がる。^⑥

これらのことから中国にあったものを、日本で応用し、さらに展開するという流れが窺える。

その中で、道真詩で見られる白い花を白い服飾に見立てるといふ構図の素地から発展し、古今集時代の歌人による新展開も見られる。それが以下に示す内裏菊合の和歌から見られる。

菊の花のもとにて人を待てるかたをよめる 友則

20花みつつ人をまつときは白妙の袖かとのみぞあやまたれける
この和歌は白菊を白袖に見立てる現存最古例である（以下は友則歌と称する）。友則歌は『古今和歌集』（秋・274）に収録され、『奥義抄』『顕注密勘』では、陶淵明の事故を踏まえていることが古くから指摘されている。⁽¹⁶⁾

ここでは、陶淵明の故事を引用し、和歌の表現はこの故事をどのように踏まえて詠んでいるかを見たい。

続晋陽秋曰、陶潜嘗九月九日無酒、宅辺菊叢中、摘菊盈把、坐其側、久望見白衣至、乃王弘送酒也。即便就酌、醉而後歸。

点線部で示したように、菊叢で待つ陶淵明に、「白衣」の使者が酒を持ってきたという。そこには見立て関係は見られない。しかし、この故事を踏まえて、友則歌では酒を持ってきた人「白衣」を、「しろたへの袖」に詠み変えたうえで、白菊をこれに見立てる構図を仕上げている。

故事を部分的に詠み変えたことは確かであるが、ここでは、注目したいのは友則歌の基本構図となるものである。友則歌の基本

構図は故事からきたものではなく、道真例に見られる白い花を白い服飾に見立てるものである。言い換えれば、友則歌では、道真例に見られる白い花を白い服飾に見立てる構図をベースに、それを白菊に応用した上で、新たに白菊を白袖に見立てる。同じ傾向はその直後の棟梁歌にも見られる。棟梁歌を再掲する。

秋歌廿首 在原棟梁

86あきの野の草のたもとか花薄ほに出でてまねく袖とみゆらんとあるように、棟梁歌に見られる、はなすすきを袖に見立てるのは、道真例に見られる白い花を白い服飾に見立てるといふ構図からの応用である。棟梁歌はその構図を生かし、それをはなすすきに応用し、はなすすきと袖の見立てを作ったのではないかと考えられる。

六、終わりに

古今集時代になって、はじめて和歌に詠まれる「新歌材」について、それは漢詩文から詩材や表現を学び取って形成されてきたと指摘されつづけるが、本論では、その「新歌材」の一つである〈はなすすきと袖〉の構図を再検討し、その形成過程を辿ることにし、それは中国にあったものを日本では、さらに変容していくという流れの中で、古今集時代の歌人が白詩の影響を受けた道真例に見られる構図を生かし、それをさらに展開したものであると論じた。

古今集時代の「新歌材」はたくさんある。これらの「新歌材」

はかならずしも漢詩文の影響によって形成されるという単純な流れではない。今後、さらに調査を進め、古今集時代の「新歌材」の動態を明らかにしたい。

注

(1) 本論文で言う「古今集時代」は古今集撰者が活躍し始め、古今集が編纂された醍醐朝から撰者たちが没する朱雀朝までを範囲とする。

(2) この歌は十卷本にあるが、廿卷本にはない。また宮内庁書陵部蔵本「寛平后宮歌合」に見られるように、結句を「袖と見ゆるは」とある本もあるが、(はなすすきと袖)の構図に影響がない為、ここでは、『新編国歌大観』による。

(3) 川口久雄「増補版 平安朝日本文学史の研究 中篇」(明治書院、一九六四年)。ここで言う「任氏伝」は唐・沈既濟によって作られた伝奇小説である。これに基づき、白居易が「任氏怨歌行」を創作した。二者の関係性についての論は、静永健「白居易の青春と徐州、そして女妖任氏の物語」(『中国文学論集 第三十五号、二〇〇六年)、また静永健「白居易「任氏行」考」(『文学研究』一〇四号、二〇〇七年三月)などが見られる。

(4) 小島憲之「古今集以前」(塙書房、一九七六年)。また小島憲之『国風暗黒時代の文学 中(上)』(塙書房、一九七三年)の第一章にも同様な記述が見られる。

(5) 本文は新釈漢文大系『唐代伝奇』に収録する「任氏伝」に拠る。「任氏伝」の本文が長文の為、本論と関わりがある部分だけを引用する。

(6) 「錦繡万花谷」は明嘉靖刻本の影印(上海辞書出版社、一九九二年)に拠る。「千載佳句」は金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集・

千載佳句篇』(培風館、一九四三年)に拠る。また、作品番号も同書に拠る。残句の判定については、植木久行『千載佳句』所収白居易逸句考(上)、『白居易研究年報』第二号、勉誠出版、二〇〇一年、また下篇は同誌第四号、二〇〇三年、新聞一美「源氏物語と白居易の文学」(第二部Ⅲ日中妖狐譚と源氏物語夕顔卷一任氏行逸文に関連して)などを参照。「任氏怨歌行」については、太田晶二郎「白氏詩文の渡来について」『解釈と鑑賞』(一九五六年八月)によると、円仁の「慈覚大師在唐送進録」承和六年に「任氏怨歌行一帖 白居易」とあり、その頃、日本にもたらされたということである。

(7) 「任氏伝」の受容形態について、余田充「任氏伝」の一受容形態―「新撰万葉集」上巻秋10の解―(『四国女子大学紀要』一、二二、一九八二年三月)が詳しい。しかし、氏は平安期に渡り、任氏と楊貴妃とが対比的に捉えられるという特徴から、上巻秋10番を楊貴妃伝に見られる表現と関連して、解釈している。上巻秋10番には、楊貴妃要素がない為、その立場を取らない。

(8) 源英明「春雨洗花顔」詩そのものが現存しない。首聯および尾聯は「作文大系」に「春雨洗花顔題、源英明詩云」とあって、収録されている。訓読は小沢正夫「作文大体註解(下)」(『中京大学文学部紀要』十九・三・四号、一九八五年)を参照。頸聯は「新撰朗詠集」(兩部・75)に引かれていて、訓読は、柳沢良一「新撰朗詠集全注釈」巻一(新典社、二〇一一年)を参照。

(9) 新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈巻上(二)』(和泉書院、二〇〇六年、秋歌51「すすき」項、内田順子執筆)を参照。

(10) 桃の花を錦に見立てる例は他に「吹入江中如濯錦、乱飛機上奪文沙」(文華秀麗集・雜詠・100・藤原冬嗣・河陽花、「紅華媚日紅逾煥、錦色須霞錦更鮮」)(経国集・巻十一・114・林娑婆・賦桃)、「蜀錦霏波依晚岸、吳娃點汗立晴沙」(菅家文章・巻五・340・上巳日對

雨葩花」との三例がある。また、『菅家文章』に見られる春の赤系の花を錦に見立てる例は他に84番・124番・324番・454番にも見られる。

- (11) 山枇杷の花を服飾に見立てる例は他に「火樹風来翻絳簇、瓊枝日出晒紅紗。」(白氏文集・卷十七・1051・山枇杷)がある。

- (12) 山石榴の花を服飾に見立てる例は他に「赤玉何人少翠軫、紅纈誰家合羅袴。」(白氏文集・卷十八・1165・喜山石榴花開山石榴)、「山榴花似結紅巾、容豔新妍占斷春。」(白氏文集・卷二十・1356・題孤山寺山石榴花示諸僧衆山石榴)、「絳焰灯千炷、紅裙妓一行。」(白氏文集・卷五十五・2599・山石榴)との三例ある。

- (13) 道真の白花例に着目した論は、高兵兵「菅原道真の白色好尚と日本的美意識…白い花を詠む詩を通して」(『詞林』三十九号、二〇〇六年四月)、高兵兵「菅原道真の比喩表現と和歌―日中詩歌比較の視覚から」(『和漢比較文学』三十二号、二〇〇四年二月)。しかし、氏は主に道真詩を唐詩、特に白詩と比較し、その相違点に着目して、白花を好尚するという道真の姿勢に重点が置かれている。また、新聞一美「平安朝文学の「白」の世界」(『女子大國文』一五七号、二〇一五年九月)をも参照。

- (14) 小島憲之「四季語を通して―「尽日」の誕生」(『国語国文』四十六・一号、一九七七年一月)、北山円正「菅原道真と九月尽の宴」(『平安朝の歳時と文学』、和泉書院、二〇一八年、初出は同題『菅原道真論集』、勉誠出版、二〇〇三年)を参照。

- (15) 本間洋一「王朝漢詩の表現覚書―王朝詩と白詩と」(『和漢比較文学叢書「中古文学と漢文学」』、汲古書院、一九八六年)、鈴木宏子「紅葉と錦の見立て―考―和歌と漢詩文の間」(『古今和歌集表現論』、笠間書院、二〇〇〇年、初出は「へみじと錦の見立て」の周辺―漢詩文と和歌の間」、犬養廉編『古典和歌論叢』、明治書院、一九八八年)。

- (16) 佐佐木信綱『奥義抄』(日本歌学大系第一卷、開明堂、一九五七年)、佐佐木信綱『顯注密勘』(日本歌学大系第五卷、開明堂、一九五七年)。

- (17) 汪紹楹校『芸文類聚 上』(中文出版社、一九七二年)。

(ほ・こうえん 本学招へい研究員)